

News Letter

2023
Winter issue

令和5年12月8日発行

Japan Society for the Sociology of Sport and Physical Education



(日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会：笹生会員提供)

日本体育社会学会

事務局：〒630-8506

奈良県奈良市北魚屋西町

奈良女子大学生生活環境学部 N120 研究室

石坂 友司 研究室内

E-mail: jimukyoku@jssspe.org

< 目 次 >

2023年度体育社会学専門領域 キーノートレクチャー傍聴記	1
研究委員会より	3
「年報 体育社会学」編集委員会より	4
事務局より	5
あとがき	10

キーノートレクチャー

「武道家からみた学校体育と体育社会学の可能性」傍聴記

秋吉 遼子（東海大学）

日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会が2023年8月30日から9月1日に同志社大学今出川校地で開催され、最終日の13時から14時に、体育社会学専門領域のキーノートレクチャーが行われた。「武道家からみた学校体育と体育社会学の可能性」というタイトルで、内田樹先生（凱風館）が登壇された。

内田先生については改めて紹介するまでもないが、1950年東京都で生まれ、東京大学文学部仏文科を卒業し、東京都立大学大学院博士課程を中退、今は神戸女学院大学名誉教授であり、凱風館で合気道を指導している。専門はフランス現代思想、映画論、武道論であり、「レヴィナスと愛の現象学」や「日本辺境論」など多数の著書がある。研究委員会（筆者所属）でキーノートレクチャーの登壇者として候補に挙がってから当日まで、本当に登壇してくれるのか疑心暗鬼だったため、姿が見えた際には小さな感動を覚えた。キーノートレクチャー前に、内田先生と研究委員会委員でランチミーティングを行ったが、質問者の方に身体の向きを都度変え、様々な質問にも謙虚かつ軽快に対応されていた様子が印象的であった。また、キーノートレクチャー開始10分前に、「今日のテーマは何でしたっけ？」とおっしゃるユニークさも人を惹きつける魅力だと感じた。

内田先生が凱風館で合気道の指導をする上で、屈辱感や劣等感を与えることと他人と比較することは絶対しないとのことであった。間違った方法で稽古している人がいたら、全員の前で「・・・をする人がいるが、修正してください」と伝える。理由は、「人の技を批判しても、うまくならない」というシンプルなものであった。日頃から合気道の指導をしていることもあり、内田先生の主張は一貫していた。子どもたちを査定しないことと優劣をつけないことの重要性についてである。唯一比べて良いのは、昨日の自分と今日の自分のみである。稽古をしていると、「自分を発見する」と指摘する。例えば、稽古をしていて、あることができるようになることや、身体部位や技術に関する気付きである。「自分を発見する」というのは、行の考え方でもあると言う。行（修行）は、英語で表現することが難しく（プラクティスは本番のための練習という意味のため異なる）、行は全体の工程がみえない中であるため、数値化できない。自分のレベルが開示されないことは、欧米の人は理解し難いようである。修行している身は、今どこにいるかわからない（マッピングできない）ため、ひたすら修行するしかないとのことである。内田・想田（2022）においても同様に、自分自身の心身の変化をモニターすることの大変さに触れられている。モニターするためにはメタ的な視点から自分を見ないといけないが、メタ的な視点から俯瞰的に自分を観察していると、行に没入する妨げになるため、とりあえずは頭から信じ、言われた通りのことを黙って行い、行に乗るというプロセスを経由しないと、行のかんどころまでたどり着けないと指摘している。

武道の必修化にも触れられた。今も反対の理由は、武道をすることで礼儀正しきや愛国心の涵養につながるという思想は、武道を手段としているためである。武道は、手段ではなく、目的である。始まる際と終わる際の礼は、場に対する敬意（礼）である。武道は、宗教的なもので、本来であれば神棚がないと成立しない（学校の体育館に神棚は飾れない）。以上の理由から、武道を学校体育に持ち込むことに、今も反対の姿勢を貫かれている。

道場と学校の違いについては、道場には卒業がなく、学校には卒業がある点をまずは挙げられた。また、道場では比較しないが、学校では成績をつけなければならない。そのためには、客観的なエビデンスが必要となり、優劣がつくような判断基準を設けなければならない。「他の教科は良いかもしれないが、体育で成績をつけることは、百害あって一利なし」とまで言い切る。「人間は死ぬまで身体を使うが、大人になって身体能力を使っている人は1,2割にも関わらず、早い段階で査定をし、優れている人だけにフォーカスしている。優れていない人に屈辱感を与えることはしてはいけない。学校体育の使命は、自分の潜在的な身体能力を発揮することに期待することである。現在は、能力の低い人を受け入れ、その人達の能力を高める所がない」という指摘には、地域のスポーツ環境を研究テーマとしている筆者にとっては、耳の痛い指摘であった。

最後に、内田先生からのメッセージは、①偉大な力を持っている子どもたちを査定しないこと、②自分の中にある潜在的な身体資源を全員に気付かせることと自分の身体能力に楽観的になること、③子どもたちはみんな素晴らしい原石であるため、誰一人取りこぼしのない学校体育を期待するとのことであった。

内田先生のレクチャーをまとめる技量は筆者にはないが、未来を担う子どもたちみんなが、自分自身の身体は大いなる可能性を秘めていると感じられるような機会に学校体育がなる必要がある。学校というのは何よりも先

に子どもたちに社会的承認を与える場である（内田、2022）。学校体育を通じて、身体を動かすことに苦手意識を持たせてはいけない。今後は、人との競争ではなく、自分自身の身体とじっくり対話できる場が、学校に限らず、必要ではないだろうか。そこに体育社会学の可能性が秘められているかもしれない。

内田樹（2022）複雑化の教育論（シリーズ・越境する教育）．東洋館出版社．

内田樹・想田和弘（2022）下り坂のニッポンの幸福論．青幻舎．

2023 年度（一社）日本体育・スポーツ・健康学会
体育社会学専門領域「研究セミナー」第1報

「子どもの社会階層とスポーツ参加」

2024 年 2 月 16 日（金） 19:00～20:30

※オンライン方式（Zoom）での開催

【登壇者】

片岡 栄美（駒澤大学）
文化社会学の立場から

【指定討論者】

甲斐 健人（東北大学）
体育社会学の立場から

【司会】

千葉 直樹（中京大学）

◆開催趣旨

本研究セミナーでは、子どもの社会階層とスポーツ参加の関係について片岡先生にご講演をしていただきます。今年度より部活動の休日地域移行が段階的に進められており、指導者への謝金を受益者負担にした場合に、家庭の経済力の違いによって子どものスポーツ参加の格差がさらに広がることが懸念されています。本研究セミナーでは、片岡先生の調査結果を通して、子どもの社会階層とスポーツ参加の関係がどのように結びつくかを理解し、どのような対策が必要か考えることを目指します。片岡先生のご報告を通して、体育社会学の研究者が今後行うべき研究課題について検討します。

◇片岡様からは、文化社会学の立場から社会調査の研究成果についてご報告していただきます。

◇甲斐様からは、体育社会学の研究者として、片岡様の発表内容に対するコメント及び質問等、自由にご発言いただくことで本議論に加わっていただきます。

◆参加申込：申込みフォーム（URL または QR コード）に必要事項を入力

◆講演から1か月間、会員限定で映像を公開予定

◆申込締切：2024 年 2 月 9 日（金）17:00

◆問い合わせ先：千葉直樹（中京大学／研究委員会）nchiba@sass.chukyo-u.ac.jp

「年報 体育社会学」編集委員会より

「年報 体育社会学」編集委員会では、現在第5号（2024年3月末刊行）の投稿論文の原稿を受け付けております。投稿された論文が2024（令和6）年1月末までに論文審査を終えて採択されれば第5号への掲載となりますが、1月末を過ぎても採択後には翌年の学会誌の刊行（第6号）を待たずにJ-stageへ早期公開し、可能な限り投稿者の研究成果を国内外の研究者に広く共有してもらえよう編集体制を整えております。投稿先を検討中という会員の皆様には、是非とも「年報 体育社会学」へのご投稿を検討ください。なお、投稿には締め切りはございません。年間を通じて投稿を受け付けておりますので、何卒よろしくお願いたします。詳細は、「投稿に関わる諸規程等一覧」をご覧ください。

https://jssspe.org/wp-content/uploads/annualreport_regulations_20230625.pdf

「年報 体育社会学」J-STAGEはこちらからご覧いただけます。

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/arspes/-char/ja>

事務局より

日本体育社会学会としての第1回学会大会、並びに日本体育・スポーツ・健康学会（本会）での体育社会学専門領域としての活動を無事終えることができました。第2回大会は関西大学堺キャンパスにおいて、2024年6月22日（土）、23日（日）に開催されます。詳細はホームページ等でお伝えいたします。

本会の理事会で学会大会における専門領域、応用（横断領域）専門部会の内容、時間配分に関する検討が進められています。本会臨時総会では、松尾代表より、シンポジウム実施を含め専門領域の活動を充実したものにすための問題提起がなされました。2024年度に大きな変更はなされない見込みですが、引き続き事務局から情報を提供させていただきます。

会員への連絡はホームページとメールで行います。本会の名簿に登録されたメールアドレスにてご案内していますが、メールが届かない方が数名おられますので更新をお願いいたします。登録変更は本会の下記ページにて手続きを行ってください。

<https://member.taiiku-gakkai.or.jp/member/>

また、メールが届いていない方がおられましたら、事務局までお知らせください。事務局のメールアドレスは以下の通りです。

事務局メールアドレス jimukyoku@jssspe.org

○理事会議事録

2023年度 日本体育社会学会 第3回理事会 議事録

日時：2023年9月1日（金）9:00～9:52

場所：同志社大学今出川キャンパス RY404 教室（対面）／zoom オンライン

出席者（対面）：松尾哲矢（会長）、高峰修（理事長）

秋吉遼子、稲葉慎太郎、大沼義彦、甲斐健人、北村尚浩、笹生心太、白石翔、高尾将幸、高橋豪仁、千葉直樹、中澤篤史、藤井雅人、前田博子、依田充代（以上理事、敬称略、五十音順）
有山篤利、宮本幸子（以上監事、敬称略、五十音順）
石坂友司（事務局長）、石澤伸弘（事務局次長）、水上博司（事務局次長）、
工藤康宏（事務局会計担当）（敬称略）

（オンライン）：浅沼道成、伊藤克広、岡安功、神野賢治
（以上理事、敬称略、五十音順）

欠席者：清水諭、長ヶ原誠、彦次佳、松田恵示（以上理事、敬称略、五十音順）

司会：高峰理事長

議事録：石坂事務局長

議事に先立ち、松尾会長より挨拶がなされた。

<報告事項>

1. 2023年度活動報告【資料①】

6月開催の総会において活動報告がなされていることから、資料の提出をもって報告に代えることが事務局長から提案された。体育社会学専門領域の会員数は354人（名誉会員22人）（2023年8月18日現在）となることが報告された。各委員会から新規の活動報告はなされなかった。

2. その他

1) 専門領域連絡会議の報告について

石澤事務局次長より、8月30日に行われた日本体育・スポーツ・健康学会（以下、本会）の専門領域連絡会議の報告がなされた。①本会の名簿管理を行っている会員管理システムの改定が検討されており、専門領域から要

望を集約する必要があること、②大会の領域横断セッション(テーマ別シンポジウム)が現在の5テーマ3課題、3年サイクルから、次年度以降5テーマ2課題、2年サイクルに変更になること、各テーマの名称変更も今後検討されていくことが報告された。

<審議事項>

1. 2023年度補正予算案について

6月の総会において、学会誌の経費削減について検討し、補正予算を組んで対応することになっていたが、3月に刊行された第4号の経費が2023年度決算にあがってくるため、修正対応は第5号、2024年度以降になることから、今回は補正予算を組まないことが事務局長より提案され、承認された。

2. 学会誌の経費削減・収入増加方針について【資料②】

学会誌の経費削減・収入増加方針について、資料②をもとに事務局長より説明がなされた。学会誌の編集方針については、①日本体育社会学会が創設されたことから、『年報 体育社会学』をより学会誌として充実するための体裁を整え、特集などを組んでいくこと、②総会資料や研究フォーラム報告はニュースレターやホームページを通じての公開とすること、③名称はそのままとする方針が編集委員会で出されたことが報告された。また、経費削減については、①7月20日に一ツ橋印刷、理事長、事務局長、藤井編集委員長、工藤事務局会計担当で検討会議を開催したこと、②経費削減策を協議し、第5号は20万円程度の削減見込みであること、③販売を行うとともに、広告費を導入し、収入増加をはかっていくこと、④契約書を交わして進めていくことが報告された。

藤井編集委員長より補足があり、継続性を重視して年報の名称はしばらくそのままとすること、学会誌のあり方については編集委員会で引き続き検討を進めていくことが報告された。

依田理事より、図書館に所蔵するにあたって、バックナンバーの提供は受けられるかとの質問がなされた。事務局長より第1号は出版社の方で在庫がなく、第2号以降は提供可能との回答がなされた。

特に異議などなく、承認された。

3. 会則・諸規程の改訂について【資料①】

理事長より理事会運営規程の新設により、会則の改訂が必要になったことの説明がなされた。また、合わせて①役員選出内規の改訂(役員任期と改廃条項の追記、※総会時に日本体育・スポーツ・健康学会の「定時社員総会」を「臨時社員総会」と誤記していることが判明し、後日修正が行われた。事務局追記)、②経費支出基準内規の改訂(シンポジウム等でこれまで1万円を支払っていた会員の謝金を支払わないことにする)、③学生研究奨励賞選考内規の改訂(奨励賞の対象者が「大学院生および学部生」となっていたことについて、本会が学部生の会員を認めていないことから、「大学院生」に修正)、④名誉会員推薦基準についての改訂(対象者に「評議員」が欠落していたための追記、並びに改廃条項の追記)、⑤理事会運営規程の新設(理事会の新設に伴う規程の新設)が審議された。

前田理事より、名誉会員推薦基準について新学会になったので過去の「世話人」の表記は不要ではないかとの質問がなされた。会長より、本会規程に合わせた名誉会員の推薦のため、過去の役員も含める必要があることの説明がなされた。

会則の改訂、各規程の改定について承認された。

4. ニュースレターの発行回数、内容の変更について

伊藤広報委員長より、学会誌の内容変更と6月の学会大会追加に関して、ニュースレターに掲載する内容、刊行時期の検討を行っていることが報告され、意見伺いがなされた。前広報委員長の藤井理事より、刊行のタイミングでニュースレターを発刊できると良いが、年報の刊行がズレることがあるので、学会案内を含め適切な時期を探る必要があるとの意見が出された。種々意見交換の結果、学会大会(6月)、本会大会(8-9月)、学会誌の刊行(3月)前の年3回を基本に発刊する方向を広報委員会で再検討することが提案され、承認された。

5. テキスト出版プロジェクトについて【資料③】

松田「テキスト出版プロジェクト」編集委員長が欠席のため、編集委員の北村理事より、編集委員会で決定されたテキストの目次、2024年11月に刊行するスケジュールについて説明・提案がなされた。また、執筆者の人

選は編集委員会に一任することが提案され、すべて承認された。

6. 第2回学会大会開催校の決定について

2024年6月に開催予定の第2回大会の開催校について、会員からの立候補はなく、事務局が個別に交渉した結果、関西で引き受けられそうな大学が出てきていることが石澤事務局次長より報告された。現時点で決定には至っていないことから、総会では理事会一任をとりつけることが提案され、承認された。

7. 会員制度の新設について

理事長より、収入増加策も兼ねて、本会会員以外の会員区分を新設することについて意見伺いがなされた。現在は本会と同じ会員となっていることから、本会の会費を支払えない大学院生が入会できないこと、新しい入会区分を作れば大学院生などの発表の場を増やすことができ、学会の活性化につながり、収入増加も見込めるメリットがあること、一方で、会員管理が複雑になることから事務局に負担がかかるデメリットがあることなどが示された。具体的な審議は次回理事会で行うことにし、今回は意見交換のみとされた。

8. その他

①理事長より、報告事項にあった本会大会の横断領域セッションの変更にあわせて、日本体育社会学会大会、本会大会の専門領域の活動について、棲み分けを行い、それぞれ特徴ある内容を展開できないかとの提案がなされた。シンポジウム、キーノート、一般発表に加えて、プロジェクト提案型、テーマ別セッションの開催など、いくつか選択肢があるため、次回の理事会で検討することが提案された。

次回理事会：2024年3月の日本スポーツ社会学会大会に合わせて開催予定。

以上

2023年度 日本体育社会学会 第4回理事会 議事録

日時：2023年10月18日（水）～10月22日（日）

場所：メール審議

議事録：石坂事務局長

<審議事項>

1. 日本体育社会学会第2回大会開催校と開催期日について

2023年度第2回総会で理事会に一任されていた日本体育社会学会第2回大会開催校の選定について、高峰理事長より関西大学（彦次佳会員）から受け入れが可能との連絡があり、会場、期日の候補が以下のように示された。特に異議などなく承認された。

日本体育社会学会第2回大会

- ・会場校：関西大学堺キャンパス
- ・開催期日：2024年6月22日（土）～23日（日）

以上

2023年度 日本体育社会学会 第2回総会 議事録

日時：2023年9月1日（金）11:30～12:00

場所：同志社大学今出川キャンパス RY404 教室

出席者数：34名

司会：高峰理事長

議事録：石坂事務局長

議事に先立ち、松尾会長より挨拶がなされた。

<議題>

2. 議長選出

会員から立候補がなかったため、事務局提案により、笠野英弘会員が議長に選出された。

2. 2023 年度補正予算（案）

6月の総会において、学会誌の経費削減について検討し、補正予算を組んで対応することにしてしたが、3月に刊行された第4号の経費が2023年度決算にあがってくるため、修正対応は第5号、2024年度以降になることから、今回は補正予算を組まないことが事務局長より提案された。異議などなく、承認可決された。

3. 会則の改訂について

理事長より理事会運営規程の新設により、会則の改訂が必要になったことの説明がなされた。異議などなく、承認可決された。

4. 学会誌の経費削減・収入増加方針について

学会誌の経費削減・収入増加方針について、事務局長より説明がなされた。学会誌の編集方針については、①日本体育社会学会が創設されたことから、『年報 体育社会学』をより学会誌として充実するための体裁を整え、特集などを組んでいくこと、②総会資料や研究フォーラム報告はニューズレターやホームページを通じての公開とすること、③名称はそのままとする方針が編集委員会が出されたことが報告された。また、経費削減については、①7月20日に一ツ橋印刷、理事長、事務局長、藤井編集委員長、工藤事務局会計担当で検討会議を開催したこと、②経費削減策を協議し、第5号は20万円程度の削減見込みであること、③販売を行うとともに、広告費を導入し、収入増加をはかっていくこと、④契約書を交わして進めていくことが報告された。異議などなく、承認可決された。

5. テキスト出版プロジェクトについて

松田「テキスト出版プロジェクト」編集委員長が欠席のため、編集委員の北村理事より、編集委員会で決定されたテキストの目次、2024年11月に刊行するスケジュールについて説明・提案がなされた。また、執筆者の人は編集委員会に一任することが提案された。異議などなく、承認可決された。

6. 第2回学会大会開催校の決定について

2024年6月に開催予定の第2回大会の開催校について、会員からの立候補はなく、事務局が個別に交渉した結果、関西で引き受けられそうな大学が出てきていることが石澤事務局次長より報告された。現時点で決定には至っていないことから、理事会一任とすることが提案された。異議などなく、承認可決された。

7. その他

特になし。

<報告>

1. 2023 年度活動報告

6月開催の総会において活動報告がなされていることから、資料の提出をもって報告に代えることが事務局長から提案された。

2. 諸規程の改訂について

理事長より諸規程の改正について報告がなされた。①役員選出内規の改訂（役員任期と改廃条項の追記、※日本体育・スポーツ・健康学会の「定時社員総会」を「臨時社員総会」と誤記していることが判明したため、資料の修正が行われた）、②経費支出基準内規の改訂（シンポジウム等でこれまで1万円を支払っていた会員の謝金を支払わないことにする）、③学生研究奨励賞選考内規の改訂（奨励賞の対象者が「大学院生および学部生」と

なっていたことについて、本会が学部生の会員を認めていないことから、「大学院生」に修正)、④名誉会員推薦基準についての改訂(対象者に「評議員」が欠落していたための追記、並びに改廃条項の追記)、⑤理事会運営規程の新設(理事会の新設に伴う規程の新設)。

3. ニュースレターの発行回数、内容の変更について

伊藤広報委員長が欠席のため、事務局長より報告がなされた。学会誌の内容変更と6月の学会大会追加に関係して、ニュースレターに掲載する内容、刊行時期の検討を行っていること、学会大会(6月)、本会大会(8-9月)、学会誌の刊行(3月)前の年3回を基本に発刊する方向を広報委員会で検討していることが報告された。

4. その他

①理事長より、本会大会の領域横断セッション(テーマ別シンポジウム)が現在の5テーマ3課題、3年サイクルから、次年度以降5テーマ2課題、2年サイクルに変更になること、各テーマの名称変更も今後検討されていくことが報告された。これにあわせて、日本体育社会学会大会、本会大会の専門領域の活動について、棲み分けを行い、それぞれ特徴ある内容を展開する必要があることの提案がなされた。

②事務局長より、午後のキーノート、一般発表セッションのスケジュールについて報告された。

議長より、閉会の挨拶がなされた。

以上

議事録署名人

高橋豪仁

議事録署名人

依田充代

あとがき

今年度より、伊藤克広先生および岡安功先生とともに広報委員として活動させていただいている、東京女子体育大学の笹生心太と申します。新体制となって2回目のニュースレターをお届けいたします。

今号は、日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会の振り返りがメインの内容となっております。体育社会学専門領域キーノートレクチャーの内容については、秋吉遼子先生のご報告をご覧ください。私は大会期間中、主に応用研究部会企画を中心に見て回りましたが、体育・スポーツ・健康に関する様々な課題について領域横断的にアプローチすることの意味、そして体育社会学の視点から切り込むことの意義が少しずつ明確になってきたように感じました。

さて、2023年は、皆さんにとってどのような一年だったでしょうか。スポーツ界に目を向けますと、ワールド・ベースボール・クラシックの優勝や男子バスケットボールチームのパリオリンピック出場権獲得など、各種競技での日本代表チーム・選手の活躍が目立った一年だったように思います。しかし、スポーツ界の外に目を向ければ、終わりの見えないロシアによるウクライナ侵攻やハマスとイスラエル軍の衝突といった世界規模の出来事から、物価の高騰のような身近な出来事まで、あまり良い話題を耳にしません。このように、光り輝くスポーツ界と、どんよりと曇る日常世界のコントラストがひとときわ目についた一年にも思えます。このような状況に対して、我々体育社会学を専攻する者は何をすべきなのか、考えさせられる一年だったかもしれません。

とはいえ、我々体育社会学専門領域のメンバーにとって、2023年は日本体育社会学会第1回大会（立教大学）が開催されたという記念すべき1年となりました。2024年には、6月に日本体育社会学会第2回大会（関西大学）が、8月には日本体育・スポーツ・健康学会第74回大会（福岡大学）が開催されます。これらの大会にて、皆様とお会いできることを楽しみにしております。どうぞ良いお年をお迎えください。